

ティヤール・ド・シャルダン奨学金 北原隆メモリアル賞 2026 年度懸賞論文募集

理工学研究科委員長 平野 哲文
理 工 学 部 長 宮武 昌史

2026 年度ティヤール・ド・シャルダン奨学金の懸賞論文を例年のように募集します。

優秀な論文を提出した学生には、以下のとおり奨学金を給付しますので、奮ってご応募ください。

この奨学金は、ティヤールを敬愛し、彼の理想に共鳴したベルギーの篤志家のご厚意により、旧生命科学研究所の故北原隆名誉教授を通して、上智大学理工学部へ恵与されたものです。

また、北原隆先生のご逝去にあたり、2008 年度より新たに「北原隆メモリアル賞」が創設されました。

1. 募 集 対 象 者 : 上智大学学部 4 年次生及び大学院生（正規課程に在学中であること）
理工学部・研究科だけでなく、他学部・研究科の学生の応募も歓迎します。
* 本学早期卒業制度の適用が認められた学部 3 年次生を含む
2. 言 語 : 日本語または英語
3. 論 文 課 題 : 変革の時代における「人間性」の保護
* ティヤール・ド・シャルダンの著作を少なくとも 1 冊は読み、その考えに触れたうえで執筆して下さい。ただし、論文は課題について書いて下さい。
* 「変革の時代における『人間性』の保護」というテーマは『マニフィカ・フマニタス Magnifica Humanitas』第 4 章の表題です。ティヤール・ド・シャルダンの著作に加え、『マニフィカ・フマニタス』を参考にしてください。

<https://www.vatican.va/content/leo-xiv/en/encyclicals/documents/20260515-magnifica-humanitas.html>



- * 今年の 5 月 25 日、教皇レオ 14 世は就任後、初の回勅『マニフィカ・フマニタス Magnifica Humanitas（素晴らしき人間性）』を発表しましたが、これは 135 年前の教皇レオ 13 世の回勅『レールム・ノヴァールム Rerum Novarum（新しい事態）』を受けてのものでした。先の回勅は産業革命後の新しい工業社会の出現に対する人間性の保護を訴える社会教説であり、今回のものは、AI 使用（特に軍事）の世界の転換点への警告です。

4. 論文体裁等 : 日本語 6,000～8,000 字 (A4 版)
英 語 3,000～5,000 words (A4 版)
* 論文課題名の他に、論文の題目を付けてください。
* 1 ページ目に、論文課題、題目、学生番号、氏名 (ふりがな)、学部・学科または研究科・専攻、要約 (日本語 600～800 字、英語 300～500 words) を書いてください。本文は2 ページ目から書いてください。
* 各ページのヘッダーに右詰めで、[氏名 ページ/総ページ数] を入れてください。
* オリジナル論文に限ります (原稿の著作権は上智学院に属します)。
* 論文作成において、生成 AI (ChatGPT など) の使用を一切禁止します。生成 AI は著者として論文の内容に対して説明責任を果たすことができず、著作権法で定義される「著作者」とはなり得ません。そのため、生成 AI を使用した内容は著作権法などの法律が適用されません。すべての内容は応募者自身のオリジナルのものでなければなりません。
* 受賞論文は、理工学部公式 HP にて公開します。
5. 提出期限 : **2026 年 12 月 3 日 (木) 23 : 59** ***締切厳守**
6. 提出先 : E-mail:f-scitec@sophia.ac.jp
* 論文は MS Word 形式のファイル (docx ファイル) とし、論文提出票のファイルとともにメールに添付して、期限までに上記宛先へ送信してください。紙媒体の提出は不要です。
* 早期卒業見込みの場合は、卒業見込み証明書の pdf ファイルも添付してください。
7. 奨 学 金 : 金 賞 30 万円 1 名
銀 賞 20 万円 1 名
銅 賞 10 万円 2 名
北原隆メモリアル賞 5 万円 若干名
8. 奨学金授与式 : 日 時 2027 年 3 月 16 日 (火)
* 受賞者は原則として出席のこと。詳細は受賞者に別途連絡します。
9. 問 合 せ 先 : 理工学部事務室 電話 : 03-3238-3300 E-mail : f-scitec@sophia.ac.jp

ティヤール・ド・シャルダンの今日における意義

以下の略歴のとおり、ティヤール・ド・シャルダン（TEILHARD DE CHARDIN）は、尊敬を集める著名な科学者であった。中国の地質学と古生物学におけるその功績は、現在も同国で高く評価されている。

だが彼の関心は科学の分野にとどまることはなかった。彼にとって研究とは、宇宙と生物進化の意味を理解し、その中に人類を位置づけるための跳躍台であった。とりわけ、この進化し続ける宇宙の中で我々人類のルーツを辿りながらも、彼の眼は宇宙と人類の未来に焦点を当て続けていた。

このような視点から、彼は人間社会の未来を生命の歴史の延長であるにとらえ、我々に、自身の未来に対してのみならず生命と地球全体の未来に対してその責任を自覚するよう促している。

こうしたことから、シャルダンは1955年の死後長期間を経た今も、科学者たちそして我々の意欲を刺激し続けているのだ。それは、今日の諸問題に対して彼が既成の解決策を提示してくれるからではなく、我々が今世紀の初頭に直面する諸問題の意味をどのような姿勢できちんと把握すべきなのかについて、模範を示してくれているからである。

何よりも、今我々自身そして地球上の生命の存続のために不可欠な第一条件となるのは、より真剣で人間らしい生き方であることをシャルダンは教えてくれている。

ティヤール・ド・シャルダン

- 1881. 5. 1 フランス中部のオーヴェルニュ地方で生まれる。
- 1889 高等学校卒業後、イエズス会に入会。
- 1911 哲学と神学の課程を修了後、司祭になる。ネアンデルタール人の研究で著名なマルスラン・ブールの指導の下、パリで古人類学の研究を始める。
- 1914 フランス軍の召集を受け、植民地歩兵連隊で担架兵として服役。
- 1919 古生物学研究所に戻り博士論文に取り組む。
- 1922 博士論文「フランスの始新世の哺乳類」を発表し、古哺乳動物学の権威として認められる。パリ・カトリック大学地質学助教授になる。
- 1923 中国に向け出発。オルドス地方とゴビ砂漠を探検、そこで旧石器時代の道具の痕跡を発見する。これが北京原人発見の序章となる。
- 1924 パリに戻る。中国での功績が複数の国際会議で認められる。
- 1926 再び中国に戻り、3回の探検に参加する。
- 1929 周口店の地質学および古動物学の指導者として、中国地質調査所の顧問になる。
- 1931 周口店で、北京原人が石器を作り火を使っていたことを示す証拠を発見。
- 1937-38 ハーバード・カーネギー探検隊に参加し、ビルマに遠征。
- 1939-46 第二次世界大戦のために北京に足止めされる。
- 1946 フランスに帰国。
- 1950 フランス科学アカデミー会員に選出。
- 1951 南アフリカに滞在。ニューヨークのバイキング人類学研究財団に迎えられる。
- 1953 ロードシアと南アフリカへ旅行。
- 1955. 4. 10 ニューヨーク市で死亡、ニューヨーク州のポキプシーに埋葬される。死後、「現象としての人間」が出版される。

北原隆メモリアル賞

「ティヤール・ド・シャルダン奨学金」は、ベルギーの篤志家のご厚意により、当時生命科学研究所の教授だった故北原隆名誉教授（1926－2007）を通して、上智大学理工学部へ恵与されたもので、生前、北原教授はこの奨学金の運営に大変尽力された。

「北原隆メモリアル賞」は、北原教授の遺徳を偲び、優秀な後輩たちの役に立つことを通し北原教授に恩返しをしたいという、教え子である卒業生たちのグループ「二日会」によって、創立100周年記念事業募金を通じて、2008年度に創設されたものである。